

「惑星つきのコミュウ」一考

—私たちは正常に生きているが、
それは何故か



コミュウ、小宮りさ麻吏奈*山本悠、C2D《カウンティング》2021

私たちは正常に生きている。こんなにも差別を生み、労働力に目も向けず、動植物の種を忘れ、何にも気が付かないにもかかわらず、正常に生きている——ように見える——のは何故か。



世界が〈正常〉にある理由を、コミュウを介して我々は知ることができるだろうか。コミュウは「周期的な波の干渉として物理的に存在し、タイムベースドメディアである生物の成り立ちに深く関わる」という。

会場の大きな壁に、両手の指が一本ずつ開いては閉じ、ゆっくりとカウントしている映像が映るのが目に入る。何をカウントしているのだろうか。考えていると頭上から水滴が落ちてきた。靴が濡れた。会場の天井には水が入った点滴バックが5つぶら下がり、そこからチューブをつたって時折水が垂れている。



床の水滴
コミュウ、地球《タップス》2021

会場で配られているハンドアウトには、「惑星つきのコミュウ」を介して次の五つの主題についての知見を得ることを企図していると記されている。

- (1) 生命は周期的な波の干渉である。
- (2) 楽曲は生命である。
- (3) 地球は生物ではない。
- (4) 地球は人間を媒体として複製される。
- (5) コミュウは物質によらずに複製される。

これはこの展示の全てを物語っている。この会場内はさまざまな〈波〉に晒され、〈生命〉は〈波〉から干渉をうけ、〈地球〉が作品を創造する立場におかれ、〈人間〉の立ち位置の循環は惑星に作用し、〈コミュウ〉は〈地球〉の不可分のパートナーとしてあり続ける。



この会場はさまざまな〈波〉に晒されている。そのことに気がつくことができるだろうか。



マイクロ波が通された紙と植物をそれぞれ水と脂質で凍らせた塊。
コミュウ《エンベロープ》2021
コミュウ《ノンエンベロープ》2021

2016年2月、アメリカで重力波 (gravitational wave) の直接観測が成功したという発表があった。^{*1} アインシュタイン最後の宿題と言われたそれは巨大質量を持つ天体同士が光速に近い速度で運動するときに強く発生するとされ、重力波が通り過ぎると時空がゆがむとされる。アインシュタインが論じてからちょうど100年後の実質的な観測である。ものすごく大きな質量がなければ観測できないらしいその波は、地球で観測しようとしてもごく微小であり、つまりそれは宇宙のどこかで起こり続けているのにもかかわらず、地球上の我々が気がつくことはないということでもある。その〈波〉は常に生命にも干渉している (かもしれない) のにもかかわらず、である。



大きなスクリーンの映像内で指のカウントがループすることや、

天井から時折り落ちる水滴がフロアをはじくことは、その空間は絶えず変わり続けることを示す。本展の英題「Kommu taps on planets」に見るように、コミュウの存在は常に惑星を、〈地球〉や〈人間〉のいる空間をつついてくる。同時に床に設置されたふたつの氷の塊や、子供用の机に設置されているワイングラスの中の氷が溶ける時、またはそれらが溶けることでできた液体が蒸発する時、それらは周りの熱を奪い少しだけ室内の温度を変え続ける。(反対に水分が凍るときには熱を発するため、雪の降る夜は暖かいといわれている。)



地球、コミュウ《イヤー》2021

地球、コミュウ《デイ》2021

子供用の椅子と並ぶ小さな机の上には、左のワイングラスには水が、右のワイングラスには氷が入っており、それぞれの脚の裏には太陽と地球のイラストが描かれている。

さらにそこへ外から鑑賞者がやってくるということは、その空間を絶えず動かし続けていることでもある。外側からの訪れや、作品を〈つくる〉存在としての〈コミュウ〉や〈地球〉は、〈波〉の干渉を予感させる。ギャラリーの内側と外側について考えたとき、小宮りさ麻吏奈と山本悠はその展示の作り手として〈コミュウ〉と〈地球〉を引き入れたことで、その〈内側—外側〉の入れ替わりをも会場内の展示の内容へと引き入れる。



メアリー・ダグラスは「汚穢と禁忌」において、〈穢れ〉の存在とはあらゆる体系の周辺に潜んでいることを説いた。^{*2}内側を意識したとき、同時に外側を意識し、その境界にあるものはタブーとされ、それがタブーであるが故に、その体系は存続し続ける。一定の状態から別の状態への「通過中」の出来事や、内側か外側か「どっちつかずの中間的状态」のものは忌み嫌われ、それこそが「穢れである」という認識に起点する俗信や儀礼は多く見られるという。^{*3}体液や髪の毛、爪などは、自分の身体から離れたものは汚いものとされる。自分から離れたものとの接触や、周辺に現れる「汚れ」(けがれ)との接触は、はしばしば差別の対象となりうる。^{*4}

ブルーベリーやシャボン液が用いられたドロイングには、染料と反応させるために作家の胃液が用いられていた。胃液は、人が口にしたもの一度体内に入り、それらによって作られる。遡って考えれば、胎児は母体から送られた栄養をもとに身体を作り上げていくため、誰かの口を通った栄養が他の身体へ送られその内部は作ら

れる。体外にあったものが——体内になり——体内の体外へ送られ——体外の体内となり——その体外はやがて完全な体外となる。ドロイングに用いられた胃液とは、作家の体内からやってきたというよりも、むしろもしかしたら体外からやってきたと言えるかもしれない。



小宮りき麻吏奈*山本悠《C2D》2021
和紙に胃酸、レモン、ブルーベリー、シャボン液が使われている。



山本の映像に現れる頭髪や、小宮の毛髪を使ったオブジェが同一の空間内にあることは、丁度その〈内側 - 外側〉の移行の中間にある様にも見える。会場内には山本と小宮の共同によりうまれたもの、さらにコミュウと地球によってそこにあるもの、また C2D という存在の協力が、複雑に内部と外部の入れ替わりを成立させる。



それは人類や生命の動きは菌/ウイルスによってコントロールされていると、どこかで聞いたことを思い返させる。我々が体内に共通のものとして保有し、そうであるが故に共同体として存在できるものがある。あるいは目の前の人や物事を真似たり複製することで、〈他〉の存在と〈自己〉の存在は同一のものとして存在することができる^{*5}とされる。それは我々の認識外で、個体と個体をつなぎ、体内と体外をつなぎ、そのつながりが生命ではないものとも同時に存在するとを可能にし、それにより我々生命は〈正常〉に生きていることができる -- ように見せられているのかもしれない。

◆

イギリスの精神科医の R.D. レインは「生の事実」の中でこう書く。^{*6}

「私は何ものにも影響されないでいるのか。

花を摘んだだけでも
必ず星の運行が乱される、
とされている

では星の運行が乱されたならばどうなるのだろう。」

私 = (細胞の) 集合体は、別の集合体からのコミュニケーションに気づいているという。

「私、あるいは私に類似した集合体たちの間には、われわれが生きているのかどうかについてさえ意見の一致がない。自分が死んでいると結論した集合体もある。ある集合体は、われわれは霊であり、受胎の時にわれわれは死に、われわれが『死ぬ』時に生命へと受胎されるであろう、と結論した。われわれが生きているか死んでいるかを、誰が言うことができよう。誰が。」

ここでハンドアウトにある「地球は人間を媒体として複製される。」という言葉思い出す。ハンナ・アーレントは「人間の条件」の中で、3つの条件「労働/labor、仕事/work、活動/action」を提示している。^{*7} その中の「労働/labor」とは「必要/necessity」に従事することだが、古代ギリシャで奴隷制度があったのはその「必要」から解放されて、公的領域で自由となるためであると述べた。〈他〉と〈自己〉のつながりのうちどちらか一方が自由になった時、そのバランスはどうなるだろうか。「人間が人間たる所以」から逃れるシステムを用い自由になろうとすること。人間が人間である条件から遠ざかること。人間は地球を複製するための媒体物だとするならば、人間であるための条件から遠ざかろうとしている人間は、その複製を正常に繰り返すことができるだろうか。ここ100年の宇宙への働きかけを思い返す。地球を複製する媒体である人間が、地球からいなくなったらどうなるのだろうか。それでも〈正常〉にありつづけるだろうか。「地球は生物ではない。」人間がいなくなっても、星の運行は乱れない——かもしれない。

- *1 — 国立天分台「LIGOによる重力波の直接検出について」 < <https://www.nao.ac.jp/news/topics/2016/20160212-gw.html> >
- *2 — メアリー・ダグラス, 塚本利明 訳『汚穢と禁忌』ちくま学芸文庫, 2009
- *3 — 波平恵美子「民俗としての性」(『日本民俗文化大系10 家と女性 = 暮らしの文化史 =』小学館, 1985)
- *4 — 竹井 夏生「差別—トラウマ・体液・聖と穢れ」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』2013,7(1):1-13
- *5 — J.G. フレイザー『初版 金枝篇』(吉川信 訳, ちくま学芸文庫, 2003) における共感呪術 (Sympathetic Magic) では、人の髪の毛や触れたもの、服、あるいは形を模したものがその人と同様に遠隔地においても作用するという。あるいはテレパシーという言葉に見る「パトスの共有」や、ミラーニューロンの作用として考えられるかもしれない。
- *6 — R.D. レイン, 塚本嘉寿 訳, 笠原嘉 訳『生の事実』みすず書房, 1979
- *7 — ハンナ・アーレント, 志水速雄 訳『人間の条件』ちくま学芸文庫, 1994